THE
Koyu
ESTD
SOCIAL
WORK and LIFE
Go local!
2017

謎の地域商社、「こゆ財団」ってなんだ？

一般財団法人こゆ地域づくり推進機構（略称：こゆ財団）は、
宮崎県新富町が旧観光協会を法人化して設立した地域商社です。
地域の人口減少を食い止め、行政機関にはなかったスピードで、
地域経済を活性化するためにさまざまな事業を行なっています。

INDEX

05
一般財団法人こゆ地域づくり推進機構とは

10
FARMERS
一粒1,000円のライチを世界へ！
森哲也さん

12
FARMERS
農業経験ゼロからの挑戦
石川美里さん

14
FARMERS
若い世代にアグリテックを伝授するパイオニア
福山望さん

16
FARMERS
耕作放棄地で希少なキュウリを守る
猪俣太一さん

20
STAFF
ふるさと納税寄付額を倍増
地元特産品の価値を全国へ！
黒木雅史

22
STAFF
こゆ朝市でまちなかを活性化
新しい“稼げる市場”をつくる！
鈴木伸吾

24
STAFF
起業家の育成や広報に奔走！
こゆ財団の想いを人へ、地域へ
永住美香

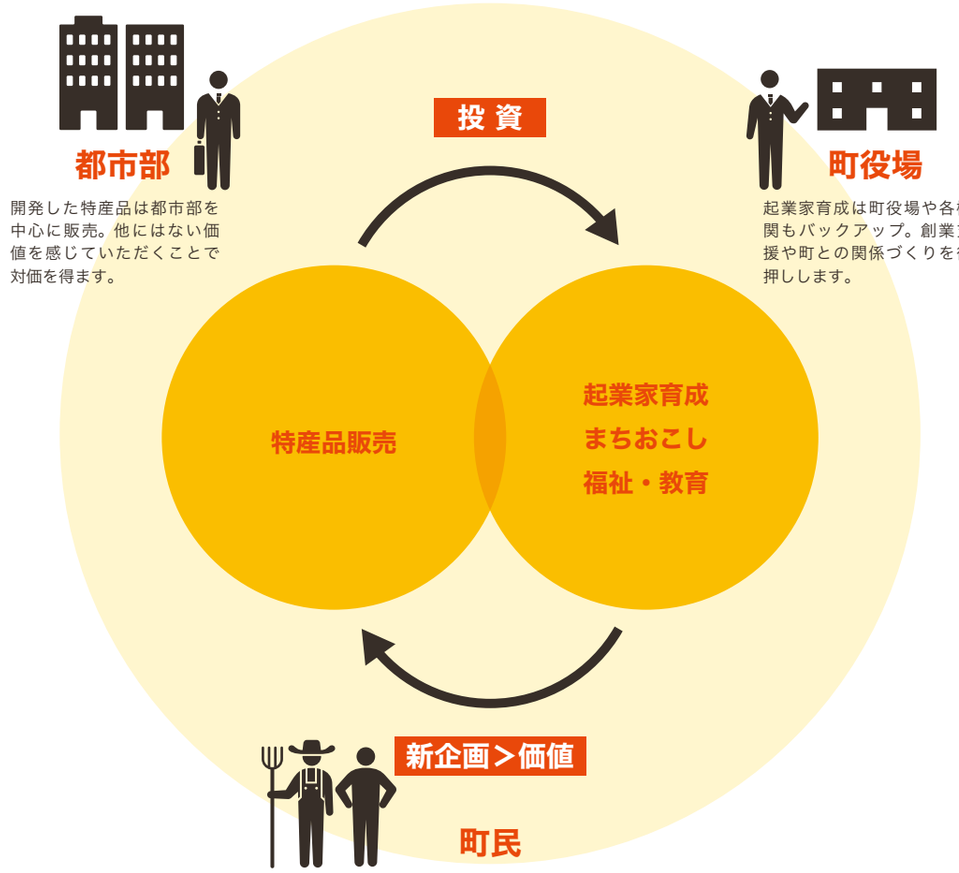
26
INTERVIEW
仕掛け人と実行役の二人が語る、
“謎”の集団「こゆ財団」とは？
執行理事 岡本啓二 × 事務局長 高橋邦男

34
SUPPORTER
さまざまなメディアへの露出が
若手農家の闘志に火をつけている
出口敏彦さん

35
謎の地域商社、「こゆ財団」ってなんだ？
代表理事 斎藤潤一

一般財団法人こゆ地域づくり推進機構とは

特産品販売で、まちづくりに投資



こゆ財団では、農産物をはじめとする町の資源を発見し、価値あるかたちへと磨き、都市部のみなさんへと発信しています。得られた利益は、町の未来を支えるビジネスを生み出すため、起業家の育成やまちおこし、福祉・教育に投資。持続可能な町づくりを行っています。

History

2017-2018

2017年4月に設立した地域商社「こゆ財団」は、新富町を含む児湯郡が持続可能な地域となるよう、さまざまな事業を展開しています。どの事業も、新富町役場や町の皆さんのご協力なくしては実現しません。私たちは地域とともに活動し、いっしょにワクワクする地域をつくっていきます。

スピード感のあるまち経営が必要だ！

4月 2017 一般財団法人こゆ地域づくり推進機構 **設立!!**

5月
- ◉起業家育成塾スタート
- ◉国産ライチ収穫開始

6月
- ◉「楊貴妃ライチ」リリース
- ◉ライチ収穫イベント開催

7月
- ◉ライチが東京で 商品化

ライチ収穫シーズン

8月
- ◉商店街に新拠点開設
- ◉起業家育成塾 第1期修了
- ◉「こゆ夜市」初開催

9月
- ◉東京でふるさと納税の啓蒙イベント開催
- ◉新規就農者の移住を支援

10月
- ◉ライチ加工品販売開始
- ◉古民家改修イベント開催

11月
- ◉「こゆソーシャルドリンクス」開始
- ◉「東京ハーヴェスト」に食材を提供

4月

多彩な人財でチームを結成
新富町役場や旧観光協会職員、民間企業など、さまざまな出自と経験を持つ人財が集まりました。

JR日向新富駅に事務所を開設
こゆ財団のはじまりはJR日向新富駅舎から。現在は主にふるさと納税の運営を行なっています。

5月

起業家育成スタート

「児湯シートル大学」第1期開校
起業家育成塾に若手農家やパン店主、地域おこし協力隊など20人の人財が集結。共に学びました。

「こゆ朝市」スタート
児湯郡のおいしいものを集めた「こゆ朝市」。毎月第三日曜を開催日としてスタートしました。

ふるさと納税で野菜・果物セットをリリース
児湯郡の農家から集めた旬の野菜や果物のセット。お茶や漬物などの加工品も詰め合わせました。

1粒1,000円の「楊 貴妃ライチ」誕生 6・7月

大ぶりの果肉にあふれる果汁
国内に1%しか流通していない国産ライチをブランド化。中でも1粒50g以上の大玉は大きな話題に。

ライチ農家・森さんに全国から取材が殺到
森さんのライチ畑には全国から取材や視察が集中。ライチ畑の中から生中継をしたテレビ番組も。

ロゴやパッケージを開発
50g以上の大玉は1粒1,000円で販売。宮崎空港やネットショップで注文が相次ぎました。

ライチ収穫記念イベントを開催
宮崎と東京で開催したイベントに森さんも参加。生果に感嘆する参加者たちと楽しく交流しました。

高級フルーツカフェでケーキやパフェに
東京「カフェコムサ」では期間限定でケーキとパフェに。銀座のお客様にも好評いただきました。

8月

商店街の空き店舗を再利用
新富町商店街に新たなスペースを開設。オフィス兼コワーキングスペースとして活用しています。

9月

「月刊ソトコト」表紙&特集に掲載
表紙の撮影は商店街のスペース前で。特集では起業家育成塾のメンバーを掲載していただきました。

10月

国産ライチで加工品を開発

ビール
「楊貴妃ライチビール」を新富町の酒店で限定販売したところ、3時間で120本を完売するスマッシュヒット。

ボディクリーム
国産ライチの種や皮、果実からとったエキスでボディクリームも開発。全身の保湿にぴったり。

「こゆ朝市」の舞台が新富町商店街に
毎月第三日曜の「こゆ朝市」は11月から商店街に移転。ますます多くの人出でにぎわっています。

11月

持続可能な
地域の実現へ

12月
- ◉ふるさと納税寄付額が8億円を突破

1月
- ◉「幸せな町の料理教室」開催
- ◉「ANAのふるさと納税」に新富町が掲載

2月
- ◉「座論梅梅まつり」開催
- ◉「移住定住促進ラボ」空き家を改修して開設

3月
- ◉日本政策金融公庫と協定締結
- ◉「こゆ朝市」来場者500人突破

12月

ふるさと納税寄付額が前年の２倍に

返礼品の一番人気は 肉

児湯郡から集めた旬の食材に申し込みが集中。なかでも鶏肉は肉厚なのにやわらかいと評判に。

全国にファンが生まれたトマト

野菜の中でも高評価なのがトマト。完熟の大玉からミニトマトまでどれも「甘い！」との声多数。

人気の返礼品は朝市にも出品

鶏肉やトマトなどは「こゆ朝市」で地元の皆さんにも販売。たくさんお買い上げいただいています。

国産ライチがアイスクリームに

乳製品加工業者、宮崎市内の高校生とのコラボで開発。3日間で1,800個を売り上げました。

1月

「地域を編集する学校」開校

情報発信を志す人財が全国各地から集結

県内はもとより、九州各県、遠くは関東からも受講生が集結。ライティングと編集を学んでいます。

2月

JR日向新富駅をリノベーション

駅舎の床に板を敷き詰め、壁にはモニターを設置。コワーキングスペースとして活用します。

3月

三者の連携で起業家をサポート

日本政策金融公庫、新富町商工会と連携協定を締結。起業や融資など幅広い相談に応じます。

豊かな土壌をつくる

FARMERS

一粒1,000円のライチを世界へ！

初めて口にした時の衝撃が、自身をライチ栽培へと導いた。

きっかけは15年前。父親が農園の一角でライチを育て始めたことだった。

「ようやく付けた実を初めて食べた時、あまりのおいしさに感激しました。とにかく衝撃がすごかったんです」

もともと町特産の洋ランを生産していたが、「父がつくったライチの味を再現したい」と方向転換。洋ランのハウスのほとんどをライチの木に切り替え、10年前に本格的なライチ栽培に乗り出した。

「味や香りが魅力的だったことに加えて、県内ではほとんど誰も栽培していなかったことが、『やろう』という気持ちを後押ししました」

何度も壁にぶつかり、生産に至るまでには長い年月を要した。地道に改良を重ねて、土地に合う品種を選り分けながら、年々木の本数を増やし、5年目にようやく安定して実が採れるようになった。まとまった量を出荷できるようになったのは、今から3年前のことだ。新富町にはライチの生産者が増えつつあるが、森さん親子がまさにそのパイオニア。試行錯誤の末、「ライチはこの土地に合う作物だ」と身を持って証明してきたことが、今につながっている。

森哲也さんがつくるライチは、外国産の冷凍ライチと比較すると、大きさは数倍。その迫力は段違いだ。

「父が何種類か育てていた中から、この土地に合った生産性の高い品種を選抜しました。それで残ったのが、たまたま大玉の品種だったんです」

皮をむくと、ぷりっとした肉厚の果肉が現れ、噛んだ途端に甘い果汁があふれ出す。圧倒的な品質を誇っているものの、森さんはそのおいしさや価値を消費者に伝えきれずにいた。そこに目を付けたこゆ財団は、森さんと一緒にライチのブランド化を進め、新ブランド「楊貴妃ライチ」として一粒1,000円で販売。2017年度は8個入りを130ケース販売した。

◎ライチ農家

森　哲也さん

「ライチのブランディングを成功させて こんなやり方があることを 地元の農家仲間に知ってほしい」

森さん自身も、東京で行われたイベントに登壇。ライチの試食を提供しながら、むき方を手ほどきしたり、味わいの魅力を語るなど、「楊貴妃ライチ」の認知度アップのために自らの言葉で伝えてきた。

「迫力ある見た目だけでも驚かれるんですが、皮をむくとパンと弾けるほど水分が飛び出し、口に入れた瞬間、香りがパーッと広がる。そのことにみなさん感激していました。一生懸命育てたライチを『おいしい』と言って食べてもらえるのは、やっぱりうれしい。お客さんの声を直接聞くことなんて、今までなかったからね」

森さんにとって、こゆ財団との出会いは大きな転機になった。

「やっぱり時代の流れに乗っていかないと、この町が進歩していかない。こゆ財団と一緒に取り組んでいることは、自分にとってあまりにレベルが高いんですが、それをやらないと町全体が伸びていかないと感じています。ライチのブランディングを成功させることで、地元の農家仲間にこんなやり方があることを知ってもらいたい。それが自分の役目だと思っています」

農業人生をライチに賭けてきた森さんは、「ライチづくりはとにかく楽しい」と、これまでの苦労をものともしない。周りから期待や注目が集まっていることも、モチベーションにつながっている。

「ライチの可能性は無限大です。というのも、まだほとんどの人が国産ライチのことを知りませんから。外国産の冷凍ライチのイメージを払拭するために、やるべきことはまだまだたくさんあります」

まだ知られていない国産ライチには、未知の可能性が秘められている。その魅力が全国に広まり、「宮崎にライチあり」と言われる日も、そう遠くはないかもしれない。

Lychee

福岡県から移住し、起業。農業経験ゼロからの挑戦。

カジュアルな普段着に長靴を合わせた格好で、颯爽と畑に入っていく。肩の力の抜けたスタイルがどこまでも潔い。この若き就農者が、2017年9月、福岡県から新富町に移住した石川美里さんだ。

農業人口の高齢化や担い手不足に伴い、全国各地で耕作放棄地が増加している。石川さんはこれらの社会課題の解決に向けて、新富町で新たなビジネスをスタート。高齢者を雇用し、耕作放棄地で有機野菜を生産・販売することで地域を活性化しようと、「みらい畑株式会社」を設立した。

「農業人口が減少する中、若者の新規就農が追い付いていない現状があります。ならば発想を変えて、若者に代わるプレイヤーとして定年退職後の高齢者の方々を雇用できないかと考えました。高齢者が経済的な余裕を持って第二の人生を楽しめる社会をつくれたら、若い人たちも将来にもっと希望を持てるんじゃないかと思うんです」

農業の担い手として期待されている若者ではなく、定年退職後の高齢者を雇用することで生産者を確保するという新たな発想で、低価格な有機野菜の生産・販売をめざす。

「昨年6月、土屋町長にお会いして、このプランの話をしたときに、『ぜひ新富町でやってください』と言っていただきました。よそ者が農業の世界に入るのは、ハードルが高いと思っていたのですが、新富町はすごくオープンかつウエルカムで、『ここでやりたい』という気持ちがすぐに固まりました」

「農業の現場を知らずして経営はできない」と、移住後は起業とともに新規就農も果たし、町の農家の協力を得ながら農業を実践している。

「新富町は人がすごくあたたかい。農業の指導をしていただいている農家の出口喜重郎さんは、お家でご飯を食べさせてくれたり、おかずを持たせてくれたりとすごく面倒をみてくださり、家族であたたかく迎え入れてくれます。町の方々もよく声をかけてくれますよ」

こゆ財団は、石川さんと役場、地元のベテラン農家の間を取り持ち、スムーズに事業を開始するためのコーディネートを担当。石川さんの挑戦を町が応援できる体制を整えた。

「こゆ財団はよそ者と地域をつなぎ、事業のスピードをぐんと後押ししてくれる頼もしい存在です。一人で立ち上げたので不安もありましたが、常に大きな支えになってくださいました。こゆ財団がなければ、新富町での起業はできなかったと思います」

「みらい畑株式会社」のオフィス機能は、こゆ財団のソーシャル・デザイン・ラボ内にあり、石川さんは毎日畑とラボを行き来している。

「ラボに来れば、こゆ財団の方々がいて、ちょうどいい距離感でいろんな話や相談ができます。起業後も、町の人たちにサポートいただきながら、ビジネスを前に進めることができ、『一人だけど一人じゃない』と思えることはとても心強いです」

今後は農業のノウハウを習得しながら、高齢者が腰を曲げずに農作業ができる補助器具の開発など、身体に負担をかけない農業の実現に向けて本格的に取り組んでいく。まずは新富町できちんと利益が出るビジネスモデルを確立し、ゆくゆくは全国に広げることが目標だ。

「社会課題の解決に自分の人生を賭けてみたい。それが私の生きるモチベーションです」

石川美里さんには、そう笑顔で言い切ってしまう底知れぬ強さがある。社会の役に立つために、人生を賭けてできること。その一点を曇りのない目で見つめ、つくり出した“生涯の仕事”。その大きな一歩を、この町で踏み出した。

「社会課題の解決に自分の人生を賭けてみたい。それが私の生きるモチベーションです」

◎みらい畑株式会社 代表取締役
石川美里さん

20年前からデータの重要性に着目。
若い世代にアグリテックを伝授するパイオニア。

20年以上も前から、独自の方法で農業にITを取り入れてきた福山望さん。新富町のアグリテック農家のパイオニア的存在だ。ピーマンのハウス内にセンサやカメラを導入して、生育や土壌の状況を記録し、収量増などの成果をあげている。

父親の影響で中学生の頃、パソコンに触れ始めた。Windowsの発売前で、インターネットも普及していないという時代にあって、興味と好奇心でパソコンの使い方を独学した。

家業である農業の道に進み、自ら経営を始めようという23歳の頃、「農業にパソコンの技術を活かせないか」と考えるようになった。それから、日々の価格や収量の変動を記録しようと地道にエクセルに入力し、手探りながら分析を始めていった。データをとることの大切さに自ら気づき、たった一人でいち早く実践してきた先見性に驚かされる。

「アグリテックが進化してきたのは、ここ5年くらいのこと」と言う福山さん。ITの進化とともに、アグリテックは急速な発展を遂げてきた。

「今は何でもインターネットにつながる時代になり、誰もがITを安価に取り入れられるようになりました。監視カメラなども安くて性能がいいものがどんどん出てきています。そういうものを自分なりに組み合わせるだけでも、アグリテックになるんです」

事務所内にあるパソコンでは、ハウス内の環境がリアルタイムで追跡され、温度、湿度、照度、二酸化炭素濃度などのデータが収集されている。これらのデータは、手持ちのスマートフォンでも手軽にチェックできる。「一からプログラムを組むとなると大変ですが、今はフリーのソフトやアプリがたくさんあります。必要なものをうまく組み合わせて、お金をかけずに自分が使いやすいようにつくり込んでいます」

福山さんはデータをとるだけでなく、それらの統合や分析も自ら行っている。データを読み解き、活用できる技術を持っていることも強みだ。“最小限の投資で最大限の成果”を生み出している。

アグリテックを推進するこゆ財団は、豊富な知識と経験を持つ福山さんとの共同研究をスタート。福山さんは、これまで独学でIT技術を取り入れ、試行錯誤を重ねながらアグリテックを進めてきたが、こゆ財団の協力を得たことで、町の農家と積極的に関わりながら、そのノウハウを若い世代に広げようとしている。若手きゅうり農家の猪俣太一さんも、福山さんの手法を取り入れ、新たな挑戦を始めた一人だ。

「若い人たちにはどんどん挑戦してもらいたい。早くから始めれば、それだけメリットは大きいと思います。興味があるなら、すぐにやってみることですね」

町の農家を巻き込むことは、福山さんにとっても念願だった。というのも、データをとる農家が増えれば、新富町全体のデータ量も増え、データの信頼度はアップする。それによって、これまで実現できなかった高度な分析も可能になるからだ。「自分たちの世代は、新富町をよくしていく使命がある」と力強く語る福山さん。この取り組みが進めば、町の農家がもっと幸せになれる、いい循環が生まれていきそうだ。

「これからAIが普及するとはいえ、何もかも機械で管理するというのも味気ない。農作物を買ってくれる方々の気持ちを考えながら、どこをどう機械に任せるのかをじっくりと選択していきたいですね」

好きが高じて、自己流のDIYでアグリテックに取り組んできた福山さんに、ようやく時代が追いついてきた。

◎ピーマン農家
福山望さん

「若い人たちにはどんどん挑戦してほしい。そうすれば町の農家はもっと幸せになれる」

クラウドファンディングで50万円の資金を獲得。
耕作放棄地で希少なキュウリを守る。

今全国に流通しているきゅうりは、高い技術で品種改良を重ねた結果、たくさん収穫しやすいもの、見た目が整っているものがほとんどだ。一方、日本に古来から伝わる在来種や珍しい品種の流通量は減少の一途を辿っている。そんな現状を受けて、新富町の若手きゅうり農家3人が立ち上がった。きゅうりの生産量日本一の宮崎できゅうり農家を営む自分たちが、「本当においしい」と言われる希少なきゅうりを受け継ぎ、多くの人に届けたい一ー。そこで2017年9月、耕作放棄地を活用して「きゅうりラボ」を開設。身の半分が白い「半白きゅうり」や極太で果肉が柔らかい「加賀太きゅうり」など、全国各地から集めた8種類の希少品種の栽培をスタートした。

「きゅうり農家なのにきゅうりの原型を知らないし、食べたこともない。そのことに危機感を覚えて、新たなチャレンジとして始めました。希少品種は、普段つくっている品種改良されたきゅうりの20分の1しか身がとれないと言われるほど栽培が難しい。試行錯誤しながら育てているところです」

「前例を踏襲するだけでは意味がない。新しいことにチャレンジしていきたい」

動き出すきっかけは、こゆ財団が運営する起業家育成塾「児湯シータートル大学」だった。猪俣さんは一期生として受講したが、同じ受講生の中に同年代のきゅうり農家が2人いたことから、3人で一緒に何かやってみようと、チャレンジできることを探し始めた。

「自分たちの課題は、年間通してきゅうりの単価を少しでも上げること。安定していい価格を維持するためには付加価値を生むことが不可欠です。とはいえ、今つくっている品種ではつくり方を変えたとしても大きく変わりばえしないので、昔に戻って希少品種を育てるしかないと思い至りました」

そこで活動資金を得るために、希少なきゅうりの栽培企画を立ち上げ、クラウドファンディングを実施し、50万円以上の資金調達を達成。希少きゅうりを復活させる活動が実現することになった。

「やっぱり『児湯シータートル大学』という場が大きかったですね。クラウドファンディングをやってみたのも、こゆ財団のみなさんの後押しがあったからこそ。ゴールは設定せず、とにかく3人で勢いだけで始めました」

高校卒業後、教師になろうと山梨大学教育学部に進学。しかし、大学の授業より農業に興味を持つようになり、家業を継ごうと故郷に戻ってきた。前例を踏襲するのではなく、「新しいことにチャレンジしたい」という思いが人一倍強かった猪俣さん。そんな思いが年々募る中、「児湯シータートル大学」が立ち上がったのは、偶然ではないのかもしれない。

「こゆ財団の人たちは、フットワークが軽くて実行力がすごい。挑戦している姿がすごくお手本になるし、刺激にもなっています。見ていて勇気が出ますね」

「児湯シータートル大学」を受講したことをきっかけに、農家同士のつながりが生まれ、首都圏に共同出荷する新たな農家グループをつくろうという動きも出てきている。

「同じ作物をつくっている農家同士が、横でつながる機会はこれまでなかったんです。でも自分たちのチャレンジをきっかけに農家がつながり、共同栽培や勉強会を行うことで経験や技術を共有することができれば、もっとお客様に喜んでもらえるものがつくれるはずです」

さらには、農家同士がもっとお互いに学び合おうと、猪俣さんの呼びかけで地元農家が集まる飲み会を開催。これまで新富町には、先頭に立って「集まろう」と呼びかけるような若手農家のリーダーはいなかったが、猪俣さんは率先してそのポジションに立とうとしている。

今や「新富町に頑張っている若手きゅうり農家がいる」という噂は宮崎中に広まり、町外のイベントに呼ばれて登壇することも増えてきた。一歩を踏み出せば、見える世界は大きく広がる。今30才という猪俣さんのポテンシャルは、果てしない。

◎きゅうり農家
猪俣太一さん

ポジティブの種をまく

STAFF

ふるさと納税寄付額を倍増。地元特産品の価値を全国へ!

成果が目に見えるので やりがいも大きいですね。

新富町役場
まちおこし政策課
から出向中
黒木 雅史

英語の教師をめざし、学生時代はカナダに留学。外の世界を見て気持ちが変わり、「地元のために働こう」と新富町に戻ってきた。役場の “若きエース” として、こゆ財団の立ち上げスタッフに抜擢され、ふるさと納税の業務を担当。受発注のシステム管理や問い合わせ対応から、返礼品として扱う新たな商品の発掘まで、業務全般を担っている。

こゆ財団設立1年目の2017年度は、ふるさと納税の寄付額を昨年の４億円から10億円にすることが目標。返礼品の数を大幅に増やし、プロによる商品撮影、web広告の掲載、寄付者へのメルマガの配信など、行政にはできないスピーディーかつ細やかな情報発信で成果につなげている。

中でも人気なのが、複数の農家から旬のものを選りすぐった少量多品種のオリジナルセット商品。販売開始後、わずか2カ月で1200万円の寄付額を記録した。

「町内のいろんな農家さんをまわって旬の商品を集め、まとめて梱包して出荷するというのは、行政ではなかなか難しい。小回りが利いて自由に動けるこゆ財団だからこそ、できることです」

また今年度はふるさと納税の新たな試みとして、ただ注文を受けて発送するだけでなく、商品のストーリーや農家の思いをしっかりと伝えることでサポートしたい人を募る「クラウドファンディング」の仕組みを取り入れた。

「返礼品のやりとりだけで終わってしまうのではなく、寄付者の方々と町がつながっていける仕組みとして、これからも続けていきたい。今までスポットライトのあたらなかった農家さんたちのやりがいにもつながっています」

黒木さんはこゆ財団で働き始めて、日々感じていることがある。

「役場では何をやるにも予算ありきで、町民を意識した事業を行うことが求められますが、こゆ財団では事業の決済がすごくスピーディーで、やりたいと思ったことがすぐに実行できる。例えば、この返礼品は今月すごく売れそうだから同じ値段で量を少し増やせば、かなりの売れ行きになるんじゃないかということも、すぐに行動に移せてしまうんです」

このスピード感と実行力がこゆ財団の大きな強み。黒木さんは、町内の農家や事業者との関わりを通して、「こゆ財団は何かやってくれそう」「一緒に何かやってみたい」という期待や意欲が生まれていることを肌で感じている。

「こゆ財団では日々学ぶことが多いですね。役場に就職して7年になりますが、財団で働き始めてから自分の思い描いていた世界があまりに狭かったことを痛感しています。ここで学んだことを役場に持ち帰ることができれば、もっと何かできることや変えられることがあるんじゃないかな。今は漠然とそう思っています」

こゆ財団と役場の間で人事交流を加速させ、役場に新しい風を吹き込みたいーー。そんな新たな思いも芽生えている。

「こゆ財団には明確なビジョンがあって、それを達成するためにスタッフがそれぞれ動いています。一つひとつの業務が “目的を達成するための一助になる” という実感を持って動けるし、成果が目に見えるのでやりがいも大きい。そんな現場にいることで、自分自身の成長を日々感じています。こんなことを多くの役場職員が体験できたら、きっとおもしろい町になる。僕と同じ若手世代は、どんどんこっちに来てやってほしいなと思っています」

黒木さんの成長は、きっと新富町のためになる。そんな若手職員を増やすため、こゆ財団はいつでもオープンな場所として、町に開かれている。

こゆ朝市でまちなかを活性化。新しい“稼げる市場”をつくる！

自分主導ではなく、お客様の目線に立てるようになりました。

新富町観光協会
・元職員
鈴木 伸吾

鈴木さんは、こゆ財団のベースとなった新富町観光協会の元職員。立ち上げと同時にこゆ財団のスタッフとなり、「こゆ朝市」の運営を担当している。

「こゆ朝市」は、2017年5月の第一回目から新富町役場文化会館前の広場で行ってきたが、11月からは町のメインストリート、るぴーモール虹ヶ丘商店街に場所を移動して開催するようになった。そこには、「シャッター通りになってきた商店街にもう一度活気を取り戻したい」というこゆ財団の思いがある。

「ゆくゆくは文化会館から商店街までずらりと店舗が並ぶような朝市にしていきたい。それには100店舗ほど集めないといけないのですが、そこに少しでも近づければと思っています」

会場を商店街に移して開催することに、商店街の店の人たちも前向きで、「いよいよ始まるんだね」「じゃあ私も何か出そうかな」という期待や喜びの声が多かった。鈴木さんは、想像以上に町の人たちが協力的だったことに心底ホッとしたという。

また出店している飲食店や農家からは、「こゆ財団がスタートした今こそ、自分たちも動くべき」という前向きな声を耳にするようになった。

「商店街や農家のみなさんは『何かやりたい』という思いはあったんですが、これまで先頭に立って動く人がいなかったんです。こゆ財団のような町の人たちと一緒に動ける団体ができて、一歩を踏み出したことを、喜んでくれている方は多いと思います」

鈴木さんは「町のイベントに関わりたい」という思いから観光協会に就職したものの、当時は「何かしらイベントをすれば人が集まるだろう」という単純な考えしか持っていなかった。しかし、「こゆ朝市」の運営に携わる中で、「実際はそんなに甘い世界ではない」と考え方がまったく変わっていった。

「ある時、上司に『自分がお客さんの立場だったらどう？』と言われたのが一番大きな気づきでした。これまでは、そこに考えが行き着かなかったので。自分たちが主導ではなく、まずはお客さんの目線に立てるようになったことが、自分の人生においても、大きな出来事になりました。いい経験をさせてもらっています」

お客さんに満足してもらうために、鈴木さんは、品ぞろえ、安さ、新鮮さを第一に考えながら、より多くの商品や出店者を集めようと動いている。

「まずは出店者と商品をもっと増やして、多くの農家さんにお店に立ってもらい、お客さんと気軽に会話をして、笑顔が生まれる。そんな町にしていきたいし、毎月第三日曜日はそんな日でありたい。商店街から国道を挟んで文化会館まで、たくさんのお店が並んで、『あそこに行ったらいろんなものがある』『第三日曜日は新富町に行こう』と言ってもらえるようになることが一番の目標です」

鈴木さんがその先に見ているのは、「若者が残りたい」と思えるような町。自分が高校卒業後、町から出てしまったからこそ、ここに残るという選択肢を当たり前のものにしたい一。こゆ財団で奮闘しながら、そうなる日をひそかに夢見ている。

起業家の育成や広報に奔走！
こゆ財団の想いを人へ、地域へ。

不安より先に、やってみよう！
という思いに駆り立てられたんです。

新富町役場
まちおこし政策課
元臨時職員
永住 美香

転勤族で各地を転々とし、ようやく故郷の新富町に戻って来たのが2016年3月。15年以上離れていたこの町に仕事で関わっていきたいと、役場の臨時職員募集に応募し、まちおこし政策課に配属された。町のイベント運営やふるさと納税のサポート業務を行っていたが、こゆ財団の立ち上げをきっかけに声がかかり、スタッフとして関わることに。こゆ財団の顔となる広報を中心に、会計、ソーシャル・デザイン・ラボの管理、起業家育成塾「児湯シータートル大学」の運営サポートなど幅広い業務を担当している。

「こゆ財団ではスピーディーにいろんな企画が立ち上がり、それらが実際に動いています。口先だけでなく行動できていることが、すごくいいなあと思っています。スタッフも少ない中、たくさんのことが同時に進んでいて大変な部分もありますが、とにかく前に踏み出しているところがとっても魅力的です」

起業家育成塾の運営、ライチのブランディングや商品開発、毎月第三日曜日の「こゆ朝市」と、挙げればキリがないほどの事業の数々。永住さんは、日々やりがいを感じながらも、「なかなか達成感が得られない」という正直な思いも持ち合わせている。

「毎日精一杯やっていますが、実際に自分がどれだけやれているのかが見えてこなくて。やらないといけないことがたくさんあるので、達成感を得るにはまだ早いのかもしれません。というのも、私は今まで接客業を主にやってきて、今やっている広報や会計はどれも初めての仕事。なぜ引き受けたのかというと、挑戦することでその先に何かがあるような気がしたから。不安より先に、『やってみよう』という思いに駆り立てられたんです。わからないことやきついこともありますが、多くの人たちとのつながりの中で、こういう仕事をさせてもらってありがたいと思っています」

こゆ財団には上も下も分けへだてなく、「みんなで一緒にやっていこう」というあたたかな空気がある。

「地元にこういう団体ができて素直にうれしいですね。町のみなさんも、きっとそう思っているはず。でも今はまだ『何をやっているんだろう』というのが正直な気持ちだと思うんです。少しずつこゆ財団の思いや実践していることを地域に伝えていって、周辺の町にも『みんなで何かやっていこう』という機運が広がっていけばいいなと思っています」

もちろん、まだスタートしたばかりのこゆ財団では、成功だけでなく、失敗も多い。

「大丈夫かなと思うこともありますが、上司たちがみんな本当に前向きなので、下を向いている暇はないですね。元気さや前を向く気持ちがないと、こゆ財団ではやっていけないので、私もとことん明るくサポートしていきたいと思っています」

いずれは地域のことを知り尽くし、「自分の目で見た町の魅力を自分の言葉で伝えられるようになりたい」という目標がある。上昇気流の時も、困難にぶつかった時も、こゆ財団を明るく照らせる存在であるために。

キーマンインタビュー

仕掛け人と実行役の二人が語る、“謎”の集団「こゆ財団」とは？

**2017年4月の設立から一年。
ここまでどんな思いで走り続けて、これからどこをめざしていくのか。
まだまだ謎多き「こゆ財団」の等身大の姿を、
立ち上げのきっかけをつくった執行理事の岡本啓二と、
唯一民間から参画した事務局長の高橋邦男が、
ざっくばらんにひも解いていきます。**

執行理事 **岡本啓二** × 事務局長 **高橋邦男**

地域課題をビジネスで解決し、劇的な変化を生む、さながらベンチャー企業

ーあらためて、こゆ財団ってどういう団体なんですか？

高橋　“財団”という響きから、みなさんが持たれる印象って、ちょっと固かったり、行政寄りやったりするじゃないですか。僕は外部の人に「どんな組織なんですか？」と聞かれたら、「さながらベンチャー企業です」とよく言っています。スピード感だったり、新しいことに貪欲に取り込んだり、新事業を少人数でどんどん形にしていくというのは、まさにベンチャーだなと思っています。

岡本　こゆ財団の説明って難しいよね。役場から飛び出した組織なので、今やっていること以上に、“行政じゃない”ことをしないと、なかなか街の人には理解してもらえないなと。僕は、国や県からお金を与えられることに慣れてしまった役場に危機感を感じて、地域の課題をビジネスで解決していこうとこゆ財団を立ち上げました。地域課題の解決というのは、活気がなくなった商店街で「こゆ朝市」を始めたことも一つ。まだ始まったばかりで、すべてがこれからやね。

高橋　うん。まだまだやし、劇的な変化を出さないと、町のみなさんは変化を感じにくいと思うんです。ファーマーズマーケットなんて、まさに思い切った展開の一つですね。
岡本　そう、目で見て変化がわかりやすい。

高橋　わかりやすさってすごく大事だなと思っていて。僕らがここまで走ってきたことでいうと、ライチのブランディングが一番わかりやすかったですね。宮崎や東京でPRイベントを行いましたが、見た目から、触った時、皮をむいた時、かじった時、食べた後まで、すべてに感動のポイントがあったんです。そんな果物が新富町でつくられているということが、これ以上の価値はないというくらいドラスティックな動きにつながった。“新富町＝ライチ”のようなわかりやすい構図をいかにつくって見せていけるかというのは、やっぱりポイントやろね。

岡本　うん、そうやね。そこで言うと、僕はずっと新富町でやってきたので、町のいろんなことを知っているんです。でもその分、先入観もあって。だから自分の感覚は無視して、周りが「すごい」と言ってくれたらすごいんだなと思うようにしています。自分の感覚は信じていません（笑）。

高橋　その点、僕は2014年に大阪から戻ってきて、今も生まれ育った宮崎市に住んでいるので、新富町のことはあまり知らなくて。いまだに道に迷いますし(笑)。

岡本　でも、さっき新富町の議員さんと話してたでしょう。ああいうのを見るとうれしいんです。どんどん町の主要人物たちとつながっていて。たぶん、彼らが顔なじみの僕に言うことと、外から来ている邦男くんに言うことって違うんですよ。

高橋　そういう意味では、二人がそれぞれの引き出しで町のみなさんと関われるのは、強みかもしれないね。新富町のことに関して、啓二くんは右に出る者はい

「地域をどうにかしておもしろくしたい。その思いで財団の設立を町に提案しました」（岡本）

「僕らがまちに DNA を振りまいていく。その先に持続可能な地域の未来を描きたい」(高橋)

ないくらい顔が聞くし、話も実行もできる。僕の中で、それを “新富力” と呼んでるんですが、啓二くんの新富力はすごいんです。それがなければ、こゆ財団は前に進みません。彼の実行力をどう活かすかというのは、僕自身のテーマだったかもしれません。

岡本　そういう話をすると、僕は邦男くんと一緒にやってきて、すごいなと思うのは、人への接し方が丁寧なんです。僕は外に出たことがなく、怖いもの知らずなので、雑なんですよ。邦男くんとやってきたことで、自分がすごく小さい人間だというのもわかったし、カスやなというのもよくわかった（笑）。一人ひとりとしっかり向き合おうと思えたのも、彼に人をリスペクトする姿勢を見せてもらえたから。そういう意味でも、こゆ財団ができたことは自分自身すごくよかったですね。

“井の中の蛙” だった役場職員が、街を変えようと外の世界に飛び出した

ーこゆ財団発足のきっかけ、そして二人の役割は？

岡本　僕は役場で認められたかったから、仕事はいっぱいして、わかりやすい成果も出してきたんです。でも街はまったく変わらないどころか、どんどん元気がなくなっていって。町を変えるためには外に出た方がいいと思って、観光協会をベースに新しいまちづくり団体を外部につくろうと提案しました。でも計画書を議会に提出したとき、「公務員しかやったことがなく、新富町から出たこともない役場職員にできるのか」という話になって。そこで2か月前にイベントで出会った地域プロデューサーの齋藤潤一くんを思い出し、相談したところ、代表理事になってくれました。それで議会も無事に通り、こゆ財団がスタートできたんです。運命を感じますね。

高橋　僕はもともと知り合いだった潤一くんから、2017年2月に「新富町に地域づくりのチームをつくろうとする動きがあるけど、興味ある？」と言われて、その場で「興味ある」と伝えたんです。その後、改めて「どうする？」と聞かれたので、「やる」と即答しました。僕は勤め人だったんですが、「地域に入って仕事がしたい」とずっと思っていたので、これ以上ないチャンスやし、すぐにでもやりたいなと。その後、啓二くんと初めて会いましたが、第一印象はすごい勢いがある人やなと思いました。役場の人なのに、アウトロー感がすごくあって（笑）。

岡本　いやいや（笑）。僕は仕事はいっぱいしてきたけど、すごくも何ともなくて。アホでカスだった僕がよく役場から外に出たなと思いますよ。潤一くんには、「啓二が外に出て、地域を変えていきたいと思っているからこそ、代表理事になった」という思いがあって。その気持ちに応えたいし、地域をどうにかしておもしろくしたい。だから、これまでやったことのない販売や営業の仕事にも挑戦しています。

高橋　仕事の分担としては、進行中の事業は僕が担当して、啓二くんはおもに新しい事業の立ち上げを進めています。でもこれから役割はどんどん変わっていくやろうし、僕らだけでやりきれない部分も出てくると思う。そこは新しい人材を迎えたいという気持ちもありますね。

岡本　うん、これからスタッフは増えていくと思うんですよ。

高橋　確実に増えますね。ここが雇用を生んでいくことが何より重要だと思う。こゆ財団が活力を帯びて、人も増えて、いろんな人材がいて、というわかりやすさや見え方って大事だなと。そういう意味では、僕ら自身が成長して雇用も生むところまでやっていく必要があるかなと思っています。

岡本　それはすごくあると思う。広島県尾道市の「ディスカバーリンクせとうち」は、地域をなんとかしようと4人で立ち上げた会社なんですが、そこからいろんな人たちと連携して、今は分社化しています。こゆ財団もそれに近いんじゃないかなと思っています。

高橋　そうあるべきじゃないかと思いますね、むしろ。こゆ財団が種火になって、いろんな事業が生まれていって、ゆるやかにつながっていく。僕らはそれを “こゆ経済圏” と呼んでいますが、そこまでいって初めて経済効果が出せるのかなと。

岡本　立ち上げや最初の仕掛けはこゆ財団がやっていくけど、実際に事業を回していくのは、独立したオーナーさんという形ですね。

高橋　そう。もちろん財団のつながりはあるけど、独立してしっかり事業を回してもらう。それは僕たちの仲間として。こゆ財団のDNAを分けていくような考え方ですね。同じ地域の未来をめざして、僕らがDNAを振りまいていく。その成果として、持続可能な地域の未来が完成するという。

岡本　ライチビールも地元の酒屋さんと組んでやっていますしね。ああいう小さな事業を大きくしていくのは、一人ではなかなか難しい。僕らみたいに背中を押す人がいないと決断できないので、こゆ財団と一緒にやった方がいいと思っていて。その積み重ねで、町を生き生きとしたものに変えていきたいですね。

圧倒的な存在になるために、とことん尖ったことをやっていく

ー 2017年を振り返って、どんな一年でしたか？

高橋　「地域に特化した仕事をしたい」

と思い続けてきたので、そのフィールドにようやくたどり着けたという思いがあります。グラウンドに降りた一年ですね。こゆ財団で仕事ができるようになったことは、僕にとって人生を変えるような大きな出来事でした。思いを実現できるフィールドが生まれた、その喜びだけで突っ走っている感じです。

岡本　僕は闇から光が差したというか（笑）。今年度で自分の殻を脱ぎ捨てて、新しい自分になれそうな気がしています。どんどんプライドもなくなって、自分自身変わったなと。それがすごく居心地がいいんです。

高橋　どの辺りが変わった？

岡本　人に対しての考え方ですね。もともと人や世の中をざっと見ていて、結構最悪でした（笑）。「お前とは違うんだよ」みたいな感じで、調子に乗ってたんです。今は仕事はたくさんするけど、ものすごくリラックスできていて、自分らしく生きることができているんじゃないかな。

高橋　たしかにプレッシャーはあるけど、ストレスはないですね。やりたいことができているからかな。一方、こゆ財団としては、とにかく密度が濃い一年でした。スタッフ一人ひとりの可能性や僕らが仕掛けてきた取り組み、この短期間でやってきたことすべてが、今年に活かせる資源なんですよね。それに潤一くんには、全国各地のいろんな人たちとつないでもらって、そこから生まれるエネルギーはパンパンになりつつあります。

岡本　最初の頃はスタッフ間でもいろいろあって、不満もいっぱい出ていました。それでもバラバラにならずに、とにかく走り続けて前に進めたことは、評価できると思います。スタッフのみんなには本当に感謝していて、どうすれば彼らがヒーローになれるのか、もっと生き生きとできるのか、というのをすごく考えています。

高橋　スタッフ全員、霧の中で無我夢中でやっていたのが、だんだん視界がクリアになって、少しずつ周りの景色が見えるようになってきた状況なのかも。さあ、ここからですね。

一設立2年目の今年は、どんなことをやっていきますか？

岡本　こゆ財団として、誰も真似できないことをやりたいですね。今まで走ってきましたが、まだ既定の枠の範囲内という感じがするんです。それだけだと何も変わらないので、普通では絶対できない賛否両論あることでも、尖ってやっていきたい。周りに批判されてもいいので。そのためにも、スタッフみんなが自分がやっていることをすばらしいと思えるような、強いチームになっていきたいですね。

高橋　僕もそこは同じです。今年いろんなことをやって一番感じているのは、もっと大きな反応や波につながるようにしたかったのに、できなかったことがたくさんあるということ。一つひとつが圧倒的でないと僕らの存在意義ってないと思うんです。せっかくやるなら、その事業の概念や枠組みを変えるところから始めないと、持続可能な街づくりなんてできない。圧倒的な存在にならないと、この先はないなと思っています。

岡本　ホラでもいいから、吹きたいですね（笑）。

高橋　そのホラが「おもしろい」と言って、いろんな人が絡んでくれるようになったら、それこそホラがホラでなくなるんですよ。大ボラ吹きたいですね、本気で。

帰ってくることが当たり前になる、地元を愛せる文化をつくる

ーその先には、この町のどんな未来を描いていますか？

岡本　まちづくりに決まった形はないと思っていて、町の人たちが住みやすく、好きだと思えるような街をつくることが大事だなと。僕らの活動を見て、やってみる人が出てきて、町が変わっていくというのが理想です。そのためには僕らがもっと突き抜けて、わかりやすい形で発信していくことですね。

高橋　それともう一つ、地元を愛せるような文化がある街がいいなと思います。僕は高校卒業後、外に出ましたが、当時は「なんやこのくそおもんない田舎は」と本気で思っていました。そこで、“成長して帰ってくる”ことが当たり前になるような文化をつくれば、自然と幸せな町になれるんじゃないかと。その文化を僕らがつくって、外に出ていく若い子たちの意識を変えていきたい。だって、最高ですもん、この町。新富町はすごいですよ。僕はずっと外から見ていますが、ええ町やなと思います。

岡本　どういうところが？

高橋　町の人たちがオープンでフラットで、みなさん本当に温かい。それにライチみたいな宝物がポンとあるわけですよ。ちょうど収量が上がってきていて、僕らにとってはこれ以上ない唯一無二の武器でしたね。これがあったから、最初の半年間は走れたと思います。

岡本　まさにそうやね。ライチ農家の森さんのことは以前から知っていたんです。こゆ財団として最初に何を仕掛けようかというときに、ライチがちょうど収穫時期を迎えるというので調べてみると、宮崎のライチはほとんど新富町で生産されていて。どこに何が埋まっているか、わからないですね。

高橋　これがなければ、こゆ財団の未来はまったく違うものになっていたと思います。

岡本　何より一年でここまでできたのは、潤一くんがこゆ財団に参画してくれたからというのも大きい。彼が世界を飛び回って培ってきた経験や力を、僕らの町のために使えるというのは幸せなことですね。

「だって、最高ですもん、この町。人はオープンだし、ライチのような宝物まである」（高橋）

「誰も真似できないことをやりたい。突き抜けたい」（岡本）

高橋 邦男

徳島大学を卒業後、徳島の出版社、大阪の編集プロダクションで編集者としてキャリアを重ね、2014年にUターン。ローカルメディアの編集に携わり、2017年6月から現職。宮崎市出身。41歳。

岡本 啓二

1999年に新富町役場に入庁。農業など数々の部門を経験し、町おこし政策課長補佐を経て2017年4月から現職。三納代神楽の舞い手で、地域の子どもたちへの指導役でもある。新富町出身。41歳。

失敗は当たり前！
楽しもう!!

さまざまなメディアへの露出が若手農家の闘志に火をつけている

こゆ財団が発足して3年間は、今後の事業展開を模索し、準備を進める“胎動期”という位置付けで考えていました。ところが、蓋を開けて見ると、代表理事である齋藤潤一さんの「失敗してもいいから、とにかくやろう」という教えもあって、ふるさと納税を通して町のPRを行ったり、商品開発をどんどん進めたり、農作物の販路を拡大したりと、フットワークが良すぎるくらい、いろんなことをバンバンやっていて、すばらしいと思っています。その一方で、スタッフみんなが猪突猛進になってしまうと、いつか脱線しないだろうかという心配もあって、私は「あまり急ぎ過ぎるな」とみんなに言ってるんですけどね（笑）。

こゆ財団の取り組みを通して、若手農家にやる気が生まれ、ふつふつと闘志が湧き始めていることを何より頼もしく思っています。さまざまなメディアに取り上げられることで、彼らのモチベーションが高まるだけでなく、周りの農家への波及効果も大きい。東京だけでなく海外にも目を向けて、農産物の販路を拡大していこうと動いているこゆ財団は、今の時代に合っているし、若手農家にとって刺激になっているはずです。

今後のこゆ財団に期待することは、やっぱり人づくりですね。一歩を踏み出す若者が一人でも多く出てくれば、周りも変わってきます。そんな中でも、ただ稼ぐだけでなく、成功したノウハウを町の人たちに伝えたりと、地域に貢献できる人が増えてほしい。どんなときも忘れてはいけないのは、地元愛、これしかありません。こゆ財団を見ていると、常に地元愛を持って行動していて、「新富町をなんとかしたい」という思いが伝わってくるんです。役場内では、すでにこゆ財団の勢いに感化された職員も出てきています。めざすは、お互いに刺激し合える関係になれること。役場も負けてはいられません。

新富町役場
まちづくり政策課
課長
出口 敏彦

謎の地域商社、「こゆ財団」ってなんだ？

いかがでしたでしょうか？

なるほどわかった
ぼんやりとみえてきた
やっぱりなんのなのかわからない

様々な意見があると思います。

それは、そうだと思います。

だって、こゆ財団は、まだ生まれたての１年生なのだから。

たった１年で、「強い地域経済をつくる」というメッセージのもと
ライチのブランド化、起業家育成、移住促進などを進めてきました。

多くのメディアにも掲載していただき
たくさんの方に視察に訪していただきました。

なんでこんな短期間に成果がでたのか？
それは、たった１つ。
こゆ財団のメンバー一人ひとりが、個性を発揮し、チャレンジし続けてきたからです。
活動を続けてきたからです。
そして、こゆ財団を取り組まく、行政、企業、町民の皆様の応援のおかげです

ほら、やっぱり謎だ。

そんな事で、結果がでるのだろうか。
わかりにくいですよね。
その謎解きをするためにも新富町に遊びに来てほしい。

そんな願いを込めて、この本を作りました。

東京から飛行機で１時間３０分。
すぐです。

ほとんどの人が食べたことがない国産生ライチや
個性を発揮し、チャレンジする人たちがそこにはいます。

そしていつでもあなたの来訪を歓迎しています。
この本を携えて、みなさんにお会いできる日を楽しみにしています。

さぁ、謎解きのはじまりです。

一般財団法人こゆ地域づくり推進機構
代表理事 齋藤　潤一

Junichi Saito

To Be Continued

一般財団法人こゆ地域づくり推進機構
〒889-1402 宮崎県児湯郡新富町大字三納代 2226-5 JR 日向新富駅舎内　☎0983-32-1082
E-mail：info@koyu.miyazaki.jp　URL：koyu.miyazaki.jp

◎こゆ財団は、2017年4月に宮崎県新富町が設立した地域商社です。特産品の販売と起業家の育成を事業としています。

こゆ財団　検索